

「高等部における社会科・理科の学習について」

～単元別指導計画表を生かした教科別の指導の充実～

長崎県立佐世保特別支援学校 主幹教諭 田添 昌代

Keyword：社会科，理科，単元別指導計画表

I はじめに

本校は、長崎県北部に位置し、昭和53年に知的障害教育を行う佐世保養護学校として開校し、昭和57年に高等部が設置された。平成19年に肢体不自由教育を行っていた野崎養護学校と総合され、知的障害教育部門と肢体不自由教育部門の両方を併置した特別支援学校となり、現在に至っている。（「知的障害教育部門高等部」は以下「高等部」という。）

高等部における社会科・理科の学習については、令和3年度まで生活単元学習の中で行われてきた。しかし、新学習指導要領の改訂を踏まえ、高等部三年間で社会科や理科をどのように学ばせていくか、どう評価していくかを考えたときに、見直していく必要があるのではないかと考えた。そこで、令和3年度の教育課程の編成から計画的に見直しを行い、社会科・理科の教科設定に向けて、系統的学習内容及び教育課程の編成を全職員で行った。

また、授業実践において、本校が現在研究で取り組んでいる単元別指導計画表の作成・活用を通して、社会科・理科の継続的な改善や見直しにつなげるための取組も併せて行った。

この取組が生徒達にとって、卒業後必要な社会人としての社会科の知識や、理科の科学的な思考に結び付けたり、学習に興味や関心をもたせて達成感を味わわせることに、つなげたりすることができればと考えている。

II 生徒の実態

高等部は、今年度1年生28名、2年生35名、3年生25名の計88名の生徒で構成されている。知的障害だけでなく、自閉スペクトラム症（広汎性発達障害）やダウン症候群等を併せ有する生徒が在籍している。また、地域の中学校の特別支援学級に在籍していた生徒や、本校中学部から進学する生徒などがおり、知的発達の段階における差が非常に大きい。加えて、生活経験についても個人差が大きく、実体験から様々なことをイメージすることが難しい生徒も多い。

そこで、国語科・社会科・数学科・理科・職業科・家庭科の各教科については各学年で四つの学習グループを編制し、実態別に授業を行っている。

特別支援学校学習指導要領の小学部2段階から高等部2段階の内容を四つの段階に分け、生徒が分かりや

すく、興味や関心をもつことができるよう、学習内容や教育課程を編成している。

III 社会科・理科の教科別の指導に向けた取組

1. 教科別の指導にした理由について

高等部では、社会科・理科について令和3年度以前は各教科等を合わせた指導の中で扱う（主に生活単元学習）としてきた。各教科等を合わせた指導は、知的障害のある児童生徒のための効果的な指導方法として広く取り入れられてきた指導形態であるが、高等部の教育課程においては、教科の指導内容はほとんど記載されておらず、特に、社会科・理科の内容については、主権者教育・植物の栽培観察などに偏りがちであった。また、各教科等の目標や内容と関連させた指導と評価が曖昧になりがちなことや、系統的な学習につながりにくいこと、教科の内容を網羅できているのかといったことが、しばしば課題に挙がっていた。そこで、今回の学習指導要領の改訂を受け、教育課程の見直しを行うことにした。

2. 教科別の指導実施までの流れ

(1) 令和3年度

- ・各教科等を合わせた指導の形態である生活単元学習の社会科・理科について協議・検討を行い、生活単元学習で社会科・理科の内容を実施するよりも、教科別で実施した方が、指導すべき学習内容が系統的に学習できるのではないかと結論に達した。

- ・令和4年度に試行、令和5年度に完全実施することで共通理解した。

- ・社会科・理科の教育課程に関する協議を行い、教育課程を編成した。

(2) 令和4年度

- ・週1時間程度生活単元学習の時間の枠の中で、社会科・理科の時間を特設し、教科の内容に沿った授業を試行的に実施した。

- ・教科等部会を中心に、学習指導要領の内容を改めて精査し、高等部の3年間で系統的な学習内容になっているか協議、見直しを行いながら次年度の教育課程編成を進めた。併せて、どの教科書が適切であるか検討した。

- ・社会科・理科の授業実践をしながら、単元別指導計画表の作成を行った。

(3) 令和5年度

- ・社会科・理科の授業を教科として完全実施。時数はそれぞれ隔週1時間ずつ（週当たり0.5）実施。
- ・昨年度の単元別指導計画表を生かし、今年度の授業を実施。
- ・令和6年度教育課程の見直しにつなげるために、作成されていない単元の単元別指導計画表の作成や、新たな取組として単元ミーティングを行っている。

3. 社会科・理科の指導の充実に向けた取組

(1) 単元別指導計画表の活用

- ・「社会に開かれた教育課程」の実施及び実現をめざして、指導内容を整理し、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れて授業改善を継続させ、「育成すべき資質・能力」を着実に育成するため、単元別指導計画表を作成している。
- ・研究内容に合わせて単元別指導計画表を作成。その中に、目標や評価、学習内容や反省を必ず記録し、次年度に生かすことができるようにした。

(2) 単元ミーティングの実施

- ・単元ミーティングの目的は、授業者同士が協議を行い、単元について評価し、次年度の教育課程改善に生かすために今年度から実施している。
- ・単元別指導計画表を作成し、授業の実施後に、単元ミーティングを行うことで、目標、時数、時期、学習内容、教材、場の設定などの振り返りを行い、次年度の授業、年間指導計画や教育課程編成に生かすことができるようにする。

IV 教科としての指導の実際

1. 社会科について

- ・教科書として「ひとりだちするための社会」（日本教育研究出版）を選定。
- ・学習指導要領に記された内容を確認しながら3年間を通して系統的に学習できるように学習内容を再配置した。特に『公共施設の役割と制度』の『我が国の政治の基本的な仕組みや働き』については、主権者教育に関連して、国や地方自治体の選挙に関する学習が中心であったものを、国会（立法）、内閣（行政）、裁判所（司法）の働きと国民を関連付けて考えたり、学習したことを基に国民としての政治への関わり方について多角的に考えたりできるように、学年ごとに計画的に学習できるようにした。

2. 理科について

- ・教科書として「やさしくわかる小学生の理科図鑑」（成美堂出版）を選定した。

- ・特別支援学校で授業を行う際に工夫する点として、できるだけ実験・観察を多く取り入れた。併せて、身近な生活と関連させ、分かりやすく関心をもたせることで考える力が育ち、理科が好きな生徒が増えるのではないかと考えた。

- ・単元ごとに教材の作製、実験器具の準備（購入）、ICT機器を活用（視覚支援や振り返り）などの検討をし、理科部会から情報提供を行った。

V 成果と課題

1. 成果

- ・指導内容が明確になり、系統性をもたせて授業を進めていくことができた。
- ・実験や観察をとおして、「思考する」「自分の考えをもつ」「予想する」ことなどを経験する機会が増えた。
- ・単元別指導計画表を活用することで、単元ごとに見通しをもって授業展開ができた。また、昨年度の授業を踏まえた改善につながった。
- ・単元ミーティングを取り入れたことで、複数の教員で授業改善について協議し、教育課程の見直しや次年度への引き継ぎも行うことができた。

2. 課題

- ・教材（特に理科における実験器具等）の整備。
- ・重度・重複障害がある生徒に対する手立てや、教材の工夫について、継続して検討していく必要がある。
- ・社会科における段階的な内容についても示す必要がある。
- ・一つの単元に対する時数が少ないことや、生活の中で生かせるように、単元設定時期の見直しが必要。
- ・単元ミーティングの時間をどう確保するか、他の教科でも行うのかについては、今後検討していく必要がある。

VI 終わりに

高等部における社会科・理科の教科別の指導はまだスタートしたばかりで、これからさらに改善、検討していかなければならないことが山積している。しかし、生徒がより豊かに、より興味・関心をもって学び、理解していけるよう今後も引き続き取組を続けていきたい。

《引用・参考文献》

- ・長崎県立佐世保特別支援学校『社会に開かれた教育課程の検討～基本的な考え方の整理と指導内容等の検討を通して～』，2021

児童の願いや実態に寄り添った学習内容の編成

大分県日田市立光岡小学校 教諭 糸永 梨沙

Keyword：年間指導計画，算数，およその数

I テーマ設定の理由

1. 本校の状況

今年度、本校の特別支援学級には、知的障がい学級13名、情緒障がい学級4名の児童が在籍している。国語、算数、自立活動を中心に特別支援学級で学習をしている。知的障がい学級では、国語、算数については、該当学年の学習内容を児童のペースや学び方などに寄り添って取り組めるようにしたり、実態や願いに応じて下学年の内容で学習内容を編成したりして、日々の学習を進めている。

また、週に1時間支援学級の児童全員が集まり、ゲームを通してコミュニケーションスキルや社会性を学んだり、学級園に野菜を植え収穫し、収穫した野菜でピザパーティーをしたりしている。また、近くのコンビニに行き、頼まれた物や、自分のおやつを買うなどの買い物学習にも取り組んでいる。

楽しい活動や興味、関心のある活動を学習の中心に据えることで、交流学級ではなかなか学習に対して前向きになれない子どもが積極的に取り組んだり、自分の考えを話したり、リーダーシップを取ったりすることができている。小さな集団だからこそ、能力を発揮させることができる場面が多く見られ、子ども達の成長につながる貴重な時間となっている。

2. 対象児童の主訴

本実践の対象児（A児）の担任となったのは令和3年度、A児が5年生のときである。A児はこのとき、情緒障がい学級に在籍していたため、国語や算数の学習内容は該当学年のものを行わなければいけなかった。しかし、実態に合っておらず、学習への意欲がもてなかったり、自己成就感や自己肯定感が感じられず、学習したことがなかなか身に付けられなかったりしていた。できるだけ身近な物を関連付けたり、分かりやすく時間をかけて学べるようにしたりしていたが、5年生の内容になるととても高度になり、それまでの内容が十分積み重ねられていないA児にとっては、とても苦しいだろうと感じていた。

5年生の2学期に「お金の払い方や時間のことなど、生活で使える学習がしたい。6年生になって、修学旅行がすごく心配。」という本人の主訴があった。私も、来年度は、より柔軟で、個に応じた学習内容を編成できる知的障がい学級で学んだ方が、よいのではないかと考えていたところであった。

主訴を受けて保護者と話し合いの場を設け、校内適正就学指導委員会で知的障がい学級への変更を検討し、次年度（令和4年度A児が6年生のとき）、知的障がい学級に入級することとなった。知的障がい学級在籍となったため、より柔軟な学習内容の編成が可能となった。特に算数科では、修学旅行を大きな柱とし、支払いにつながる学習や時刻・時間に関する学習など、本人の願いや実態に寄り添った学習内容で、編成していきたいと考えた。特にA児が修学旅行で楽しみにしていたお土産を買う活動で、自分で財布の状況に合わせて支払いをしたいという願いに寄り添って、学習内容を編成していきたいと考え、実践を行った。

II 対象児の実態

1. 対象児について（生活面・性格・興味・関心）

本実践を行ったのは、令和4年度、対象児が6年生のときである。指示を聞いて動くことや、教師や友達と日常会話をする、集団行動をすることなど日常生活について、あまり困難は見られず、交流学級でも楽しく過ごすことができていた。支援学級や交流学級で積極的に意見を発表したり、困っている友達に進んで言葉をかけたりする姿が多くみられ、応援団やまとめる役割などに、積極的に立候補する児童であった。ファッションやかわいい文房具などに興味があり、新しい物を買ってもらえると嬉しそうに伝えてくることもあり、自分で買い物ができるようになりたいという意欲をもっていた。5年生のときから修学旅行を意識しており、買い物での支払いの仕方や、時間を見て行動することに対して不安をもっていた。

2. 対象児について（学習面）

学習障がいがあり文字を読むこと、書くこと、計算することに困難がある。漢字の読み書きについては2年生程度で、教科名など日常生活でよく目にする漢字については読めるものもある。読むことについて特に困難が見られ、平仮名、ルビがあっても、読むことが難しく、一字一字読むことで精一杯のようだった。目からの情報よりも耳からの情報のほうが優位で、何度も聞くことで物語や設問を理解するようにしていた。

四則計算について、定規のめもりを使って数え足しや数え引きをすることで、基本的なものができていた。かけ算九九を覚えることは難しく、九九表を使って計算するようにしていた。5年生まで3桁の数字を読んだり書いたりすることが難しく、「123ページを開き

ましよう」などの指示を聞いて正しくページを開くことが難しかった。千円札だけで買い物をしたり、ちょうどの金額を揃えて支払ったりすることはできていたが、ちょうどの金額が支払えない時に、どうすればいいのか困っていた。

Ⅲ 指導の実際

1. 学習内容の編成について

前述のように、6年生での学習内容は、10月末にある修学旅行を大きな柱として、編成していくようにした。修学旅行で特に不安に感じていたお金の支払いに関連する学習を取り入れて組み立てていき、1学期には大きな数の学習に取り組んだ。買い物場面を想定して、3～4桁の数について理解できていなければ、支払い場面で困ると考えたからである。2学期に入ると、およその数について取り組んでいった。買い物のときに、いつも千円札だけで支払いをしており、小銭がたくさんになってその次に買い物をするときに困っていたり、ちょうどの金額がいつも支払えるわけではないので、困っていたりするという児童の実態から学習を取り入れた。財布の中身を見て、ちょうどの金額が支払えない時に、提示された金額よりも多めに支払うことができれば児童の困り感が解決できると考えた。

2. 授業実践

大きな数では、対象児は3桁の数字について読んだり書いたりすることが難しく、100を超えると数の進み方がわからなかった。10のかたまりブロックや磁石での操作などを通して十進位取りを使った数の仕組みを学習していたが、一の位で1が10個集まって10のまとまりとなり、十の位に繰り上がる（十の位から百の位への繰り上がりも同様）ということの理解が難しかった。そこで、身近なものである金銭を使って学習を行うと、1円と一の位、10円と十の位、100円と百の位を対比させて考えることができ、位が繰り上がっていくことの理解につなげることができた。この学習で、十進位取りを使って数の仕組みを学ぶことができ、数がどのように増えていくのかを理解することができた。また、4桁の数字まで読んだり書いたりすることができるようになった。

およその数では、対象児の好きな歌手の曲の人気投票（数字については1000までの数）について表にしたものを使い、票数を見てすぐに比べやすくするには、どうすればよいか考えることから始め、およその、分かりやすい数字にする方法として、概数があることを学べるようにした。切り上げや切り捨ての方法を学び、十の位の概数、百の位の概数にする方法も学べるようにした。

その後、ちょうどの金額が支払えないときにどうすればよいか・これまでの学びを生かして、考えるよう

にしていっていった。限られた金種が何枚かずつ入っており、千円札も入っていない財布を使って買い物をする場面を仕組み、どうやって支払えばよいか考えるようにした。その際、位取り表を使って、財布の中に入っている硬貨を操作できるようにし、支払う金額を切り上げて、十の位までの概数にしたり、百の位までの概数にしたりして、どの金種を何枚揃えるのか考えられるようにしていっていった。

すると、一の位が揃えられないときは十の位の枚数を1つ増やす、一の位も十の位も揃えられないときには百の位の枚数を一つ増やすなど、多めの金額を考えて支払う方法に気付くことができ、提示された金額を見て、財布の状況と照らし合わせて支払う金額を考えることができるようになった。

3. 実際の買い物場面を想定した学習

ハウステンボスの商品を一覧にして、タッチパネル方式で欲しい商品を選び、金額を確認し、財布の中身に応じて支払いをする学習場面を設定した。実際にお小遣いの5000円を財布に入れておいた。始めのいくつかはちょうどの金額で支払えていたが、徐々にちょうどの金額が支払えなくなると、位取り表に金額を書き、十の位が足りないときには百の位を一つ増やす、百の位が足りないときには千の位を一つ増やすというように学習で学んだことを生かして、支払うことができるようになっていった。

Ⅳ 成果と課題

修学旅行でお土産を買う時には、自分の財布の中身を確認し、電卓で代金の合計を計算する、財布の中身を見て支払う時に揃える硬貨や紙幣を考えるという手順で、自分で買い物をすることができていた。振り返りでは、「買い物をまたしたいと思った。」「修学旅行では買い物が一番の思い出になった。」というように、学習が充実しており、自信をつけることもできたことが伝わってきた。

今回の実践では、修学旅行で、自分でお土産を買えるようにお金の支払い方を学びたいという、A児の願いを軸に学習内容を編成していった。学習を通して自信をもち、支援学級の下級生にお金の揃え方を自ら説明してあげている場面も見られるようになった。日常生活でも買い物をする機会が増え、A児の生活の質の向上につながったと考えられる。学んだことが生活に直結することで学んだことの定着も見られた。日田市内の支援学級では、学習内容が願いや実態に合っていない子どもが、まだまだいるということが課題であるという意見があった。子ども達の学びがより充実するよう学習内容の編成を工夫する必要があると感じている。